
竜 ~The blue dragon which cannot fly~

上総睦

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜
→ The blue dragon which cannot fly

【ZPDF】

Z9999F

【作者名】

上総睦

【あらすじ】

奥州を中心に全国を縦横無尽に駆け巡った、かの竜に例えられた青年は、もはやもう飛翔することは出来ないと、そう、啼いた。駆けて駆けてを目指した先に、自分の影は残るのかと。戦国BASAR A長編パラレル（予定）

序（前書き）

これは完全パラレルストーリーです。実際のBASAの軸とは関係ないと思われます。

序

限りなく広がる荒れた荒野に、一人、片目のみの竜が、自らの爪さえ投げ出して佇んでいた。

左腕の袖がはためく。

まるで、音に聞く竜の髪のように、鬚のついた。固く結ばれた唇から、堪えきれない呻きが漏れて、蒼き竜は、力が抜けたようにその場に崩れ落ちた。

渴いた土に膝をつき、頭を垂れて砂を握る。

それは懺悔にも似た、音のない慟哭。

一滴の涙が、砂地に吸い込まれ、消えた。

奥州からもう何日走ってきただろうか。

向かい風に髪をさらになびかせ、竜の一ツ名を冠した男は、甲斐を口指して駆け続けていた。

目付け役である右目の監視の網目を抜け、勝手気ままに領地の外に出て行くのはいつものことだが、今回は様子が違う。

何かに急かされるように、早く、一刻でも早くと、身体の悲鳴も無視して。

幾許かの時が経った頃、馬が掠れたいななきと共に倒れた。

馬上の影は瞬時に身体を翻し、澄み切った宙に、藍染めに銀の刺繡が映える羽織りが舞う。

クソッ、と短い咳きを漏らすと、微かな音をたてるのみで着地した。

痙攣し続ける倒れた馬の傍に寄り、灰がかつた鬚を労るようになじみでた。

男はゆっくりと感謝と謝罪の意を込めた目礼をし、振り返る事なくその場を駆け去った。

行かなくてはならない。

とにかく、今はただあの場に向かうことしか許されない。
行かなくてはならない。

そう。

そろそろあの小煩い参謀が気づいた頃だらう。
自分の思惑通りにいけば良いのだが、とは思いながらも、彼もあ
れが一筋縄では行かないことは、彼こそが誰よりも身に染みてわか
つていて。

四国の鬼さんには迷惑かけちまうなあ、いきなりの文と事実に狼
狽する姿がその見えない右目に浮かび、そつと微笑する。
まるで頭と身体が別々のように働いていて、やけに熱い身体に反
比例して、脳髄はうつすらと冷えていた。

周りの木の陰から、数人の殺氣を発され、それを感じた男は背後
へ跳ぶ。

野盗か山賊かはわからないが、どちらでもいい、どうやら彼も運
がない。

よりもよって、この状況下で狙われてしまつとは。

舌打ちがひとつ。

その音があたりに響く前に、僅かに動いた影まで一気に間合いを
詰めると、ぼろを纏つた痩せ型の男を殴り飛ばした。
後方から殴りかかってきた一人を、振り向きざまに抜き身で一閃。
雄叫びをあげる大柄な最後の一人を、袈裟に斬り下げる。
四人：まだそこらに仲間がいてもおかしくない。

これ以上厄介事に巻き込まれるのは御免だと、彼は早々にその場
を離れた。

幾らかの時が経ち、夏天の日が高々と掲げられた頃、身体の調子
が完全ではない彼は、息を切らしながらも武田の門前に辿り着いた。

ざわざわと木立が揺れる。薄気味悪い音が響く。

門番が居ない。

この地の領主である武田の屋敷に見張り役が居ないなど、ありえないことだ。

政宗は辺りを見回した。しかし、気配は無い。

どうぞで暇を潰している兵士なし平民のものはないか、鳥やら獸の気配すらも、微塵も感じられない。

動搖している自分が居るのは重々承知しているが、そんなことまでわからないほど疲労困憊しているつもりは毛頭ない。

で、あれば。

考えられるのはこの俺に対する話以外はない手練が潜んでいること。伊達政宗が此処まで来ることを知つていて、わざと兵を下がらせこちらの様子を伺つているということくらい。

ハツ、と政宗は囁つた。

なれば一人しかいまい。

この屋敷付近に居るべき者で、尚且つ、自分に気取らせぬほど手腕の者。しかし兵でも武将でも無い。そして、武田信玄からの信頼も厚いであろうと来れば。

「Hey、隠れてねえで出て来いよ。猿飛佐助」

無音のままの空間に、瞬きの間に影は現れた。自然色を纏つた橙の髪の忍。

その顔に浮かぶのはいつもの巫山戯きつた笑顔でなく、戦の時に見せる真剣な表情でもなく、むづ、眞づなれば苦虫を噛み切ったような、そんなもの。

何故、といつのは問うだけ無駄だ。理由は誰よりも一番良くわかっている。

突然の訪問に表情を濁すような柔な男ではないだつし。

「Ha! どうしたよ、シケた顔しやがつて」

それでも聞くのは、強張つた雰囲気は俺が不得手だからに他ならない。

「別に何も、つてわけにもいかないでしょ。その姿見たら、いくら俺様でも平然とはしてられないって」

軽口の片鱗が微かに混じりながらも、いつもの調子ではないそれに返事のしようが無い。

軽く溜息を一つつくと、光ある左目で、自らより顔を逸らす佐助をだれた様子で見つめる。

「おい、中入れる」

「…遠路遙々何の御用で？」

今更かよ、と呆れて言うと、ひらひらと佐助は両手を降つた。

「やつぱり用件くらい聞かないとさ。これでも一応任されてるんでね」

で、何の御用?と重ねて問われ、忍べそうも無い格好の忍に政宗は背を向けた。

できることなら他の人間には話したくない内容ではあった。しかし、この男に知られるのは時間の問題だということも知つてゐる。チラリと振り返り、人差し指で近くへ来いと呼ぶ。ひと他人に聞かれたくは無い。

訝しむ様子を知つてか知らずか、先程よりも苛立つた調子でその行為を繰り返す。

何さ、と呴きながら大人しく近くに寄つたことを確認すると、その耳元でぼそり、と小さな声で告げた。

佐助は驚いたように、そして信じられないとしても言つ風に眼を丸くさせると、じつと政宗の顔を見つめた。

「本氣で言つてるわけ」

「俺はいつでもseriousだが?」

「南蛮語なんてわかるわけないでしょ。…まあ、いいや」
軽々と地を蹴つて塀の内側へ消える。ガチャリ、と重い音がして
扉が開いた。

「承知しましたよ、竜の旦那。」あらへ、どうぞ?」
芝居がかつた仕草と口調。しかし眼は笑っていない。
政宗はザツ、と草履の裏で石を踏むと、その仰々しい門の中へと
姿を消した。

強い風に木立が啼く。

明るかつた空にはどんよりとした厚い雲が広がり始めていた。

屋敷の中はやけに静かだった。

何があつたのかは知る由も無いが、そのうち明らかになることだろう、と政宗は意識してその静けさを無視した。

しかし、気味の悪いくらいの静寂は、背筋を這いつゝに侵食する。自分の呼吸音すら煩わしくなるほどに、そこには音とうものが存在しない。

政宗の前を歩く佐助は、さすが忍といつべきか、足音は勿論のこと、息遣いも衣擦れの音も一切させずにいる。

上に羽織っているのが柔らかな布であろうと、指先まで固められた金属の鎧を、無音のまま動かすのは不可能に近い、筈であるのだが。違う、いや、そうではない。忍と同じ田線でモノを考えること事態がおかしいのだ。おかしいのだ。

そつこの俺が、混乱している。

政宗は静かに深呼吸を一つすると、引きつる類をペシヤリと咤咤して真っ直ぐ前を向いた。

何も考へる必要は無いのだから、と。

「竜の旦那」

「H a？」

急に立ち止まられて政宗の足元がもたついた。当然、ぶつかるような無様な真似はしていない。

「この先真っ直ぐ行くと、辺りが一気に明るくなつて、俺の部下が出てくると思う」

俺様用があるから。佐助はそれだけ言い残すと、言われた政宗の返事も聞かずにつきと消えた。

折角の guess に対して失礼だつて、と政宗は思わないことも無かつたが、あくまで俺は押しかけた立場。それに、敵国の大将。歓迎を求めるほうが、余程無理がある。

一つ一つ理論付けないと納得できないのは脳内の理性が必死に働いているからだと、そんなことにも理由付けをし始めた自分の身体に、腹ただしさを確かに感じながらも政宗は今立ち止まっている。

それでも歩かなければ仕方がない。

ギシリ、と踏みしめた板の悲鳴に小さく息を切らして、脳裏に描いた煌々と輝く篝火を睨んだ。

参（前書き）

武田のお屋敷の構造は思ひつゝもつ強造です。

しばらくは聞だつた。

独りになつたことでその静寂がより一層に強く感じられる。

「武田の屋敷つてからには、もつちよつと騒がしいかと思つたんだがな」

そう小さく呟いた声も、反響してやけに大きく政宗の耳に届く。

常の大将殿とその懷刀の様子とは相反する、静けさ。

しかし、あの暑苦しく豪快で磊落な姿と立ち居振る舞いの中には、冷静で冷徹な眼と底冷えがするような策略が渦巻いているのを誰もが知つている。そうでなければこの乱世ではまず生き残れない。

そうした一面性こそが、武田信玄といつ男の強大さと有能さの根源であり、実際佐助という卓越した技と観察眼を持つ忍を召抱えていたことからも、外交や戦に対しても慎重な姿勢が窺えた。

その一方で、真田幸村のような武一辺倒の将を寵愛しているのも食えない点だ。彼自身も知将よりかは猛将の出で立ちであることも含めて。

それにしても長い廊下だ、と政宗は知らず眉間に皺を寄せた。

大方あの猿の時間稼ぎだろうと思つてはいたが、それにしても、長い。

いくら大名の屋敷とて、城を持たないからといって、これだけ広く感じるには異常だ、と感じたその時、突然に鋭い光が生きた左目を射した。

その眩さに数瞬足を止め、片方しかない目を凝らして火の辺りを見る。

忍そのもの、といった黒の布地で身体を覆つた軽装の男が一人、その扉の両隣に仰々しく立つていた。

息を深く吐いたのは、決して安心から来るものではない。

早鐘のように鳴り響く鼓動を治めるためだ。

「ま、さすがは信玄公つてどこか。自分の領分じや『*えむおとせ*』
sureが一味違つ」

背中にツツ、と冷たい汗が伝つたのに何を感じない振りをする。
意識したら負けだと、今この場では圧倒的弱者の立場であるにもか
かわらず、政宗はその唇の端に余裕にも見える笑みを浮かべていた。
止まつていたその足を一步踏み出すと同時に、扉の左右に立つ忍に
厳しい目線を送る。

「入つていいのかよ？」

口調こそ茶化しているような軽いものであつたが、その声音の低さ
と凄みに佐助直属の手練の忍の片方が肩を震わせた。
もう片方が少々ぎこちなくも頷くのを見届けて、政宗はじや、遠慮
なく。と年季の入つた扉を開け放つ。
襖から漏れ出ていた光にふさわしく、田舎の部屋の中は明るく照ら
されていて、政宗は眩暈に近いふらつきを覚えながらも、鎮座する
相手を努めて冷静に見つめた。

武田、信玄。

その隣には先程まで共に居た忍も控えている。

「この度は急な来訪にもかかわらず御通し頂きまして、真にありがとうございました、信玄公。変わらずご健勝のようで、なにより」

慇懃無礼をそのまま形にしたように、恭しくも少量でない皮肉を冷ややかに込めて、政宗はゆるりと一礼した。

その証拠、とでもいうように、唇は弧を描いている。

信玄はその様子に対し、呆れたのか伊達政宗らしいと思つたのか、応えるように厳めしい顔で笑つた。

「久しいな、伊達の。そのようにかしこまらんでも良いわ」

それでは、と腰を下ろして鋭い独眼で信玄を射抜く。

「今日此処まで来たのは他でもねえ。事情はそこの忍、と、俺の姿でも見りやあわかるか」

途端に碎けきった口調に変わった政宗を咎めることはないが、嫌そうな顔すらせずに信玄は自嘲気味なその言葉を聞いた。

伊達政宗、という男がどういつにかはよくよくわかつている。

それは事細かに各國の調査を行う、武田の誇る優秀な忍による諜報の成果でもあつたし、幾度か戦を交えたことにもよつたが、何より信玄自身の可愛い若虎の影響があつた。

よく言えば豪快、悪く言えば短慮とも思える行動。しかしその裏には、優秀な参謀と彼自身の巡らせる伏線と罠が待ち伏せている。だからこそ、信玄は理解できないとも思つていた。いや、図りかねていると言つた方が正しいだろうか。

大まかな話は佐助から聞いた。

しかしそれが果たしてこの男の真意かどうか。
確かめるまでは是、と言つては、いかない。

「して用件は」

「信玄の言葉を聞くとエ、と耳慣れない発音で政宗は呟つ。

「聞いてるんだろ？そこのお猿さんからよ」

「やだなあ、俺様なーんも喋ってないよ」

顎でしゃぐると素知らぬ顔をして佐助が口を開いた。

それを無視して政宗はスッ、と表情を無くした瞳で前を向いた。

「…信玄公に心よりお頼み申しあげる。我が伊達家と、同盟を結ん
じや、くれねえか」

見苦しくて申し訳ねえが、と政宗はほんの少し左肩の上がった平
伏をした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9999f/>

竜 ~The blue dragon which cannot fly~

2010年10月13日16時29分発行